

行政視察報告書

報告者 足立 義弘

【視察日】 令和6年9月30日（月）～10月1日（火）

【視察先】 茨城県 阿見町

【視察項目】 菌根菌を用いた稲作について

【視察内容】

茨城県阿見町は、大学等と共同で稲の栽培に菌根菌を利用する方法についての実証研究プロジェクトを開始していた。この方法は水田に水を溜めない新しい手法であり、「SNS」や「YouTube」で広く紹介され、多くの農業従事者から高い関心を集めている。そのため、プロジェクトの説明を受けた後に、菌根菌で栽培している圃場を見学した。

【所感】

阿見町は、茨城県の南部に位置しており、2024年9月時点での人口は約50,183人。ここでは住宅開発や工業団地の造成が進んでいることから、このため全国的にも珍しく人口が増加していた。そのため、町から市への移行を準備していた。阿見町の農業では、米、大玉スイカ、レンコン、メロン、蕎麦、サツマイモ、加工用ジャガイモなどが栽培しており、特に、サツマイモの栽培面積が広がっていた。

阿見町で開始した「菌根菌の実証研究プロジェクト」は、昨年、阿見町の認定農業者の要請で企画され、今年の8月9日に正式に始まり、茨木大学農学部や井関農機などがこのプロジェクトに参加し、来年度からマイコス菌と呼ばれる菌根菌を用いて稲や野菜の実証研究を予定していた。

①菌根菌の効果検証については、稲の移植栽培期間中の中干し後、水田に水を入れず、収穫まで水管理を行わない栽培方法の調査を計画していた。また、水を入れない水田における雑草対策についても研究を予定していた。さらに、蕎麦や麦の収量や生産コストなどの効果についても検証する予定があった。

②水田雑草の問題については、菌根菌を使用して稲の湛水期間を短くするなどの水管理作業の影響により、今まで使用していた除草剤の効果が得られにくくなり、稲の生育初期や生育中期の期間に雑草が多くなることで、稲の生育を抑制してしまい株の分けつの減少や茎が細くなるなどの生育障害がでていた。

③稲の分けつについては、菌根菌を利用して、苗を水田に移植した水田に水を溜めて稲の分けつする期間に水の供給を抑制した場合は、稲の茎が増えにくく、穂数が減少したことで収穫量も減少した事例がでていた。この問題は、水管理だけの原因が影響しているかは現時点では分かっていなかった。

課題としては、大分市の水田や畑で栽培する植物に菌根菌が適しているのかを確認する必要があると感じました。まずは、市内の集落営農組織などの稲を大規模に栽培している組織に菌根菌を紹介して、労働時間の短縮や生産コストの削減に繋がる資材であるかを確認していく必要があると感じました。

【視察先の様子】



菌根菌を利用した飼料用米（品種名：夢あおば）

